

論題	関東形式と箱根山の石塔類について
著者	斎藤彦司
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— (神奈川県立博物館研究報告) 第 10 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1982 年(昭和 57 年)3 月
判型	JIS-B5 (182mm × 257mm)

関東形式と箱根山の石塔類について

斎 藤 彦 司

神奈川県下には、中世に造立された多くの石塔類が遺っていて、石造美術の宝庫とも呼ばれる地域のひとつにあげられている。いうまでもなく、鎌倉は、県下でもその分布密度の高い地域である。そして、これら県下に遺る石塔類の大多数は、「関東形式」と呼ばれる一連の特色を有するものである。この関東形式というのは、川勝政太郎氏の研究によるものである。

川勝氏は、鎌倉に多く遺る石塔類の中で、最も関東形式の特色が良く備わり、しかも、遺品例の多い、宝篋印塔についての研究によって、関西地方で見られる宝篋印塔との相違点に注目して、関東形式の特色を明らかにした。^(注1) 川勝氏は、その後も、関東形式についての研究を進め、関東形式の成立過程およびその祖形、製作工人（石大工）などに関して、新発見の遺品などを駆使して、いくつかの論文を発表してきた。^(注2・注3・注4)

川勝氏は、関東形式の出発点を、
箱根山宝篋印塔〔神奈川県足柄下郡箱根町元箱根 精進池畔 伝多田満仲墓 正安二年（1300）銘 重要文化財〕（図1）

に求め、

余見宝篋印塔〔神奈川県足柄上郡大井町上大井余見 伝源頼朝墓 嘉元二年（1304）銘〕（図2）

を経て、

安養院宝篋印塔〔神奈川県鎌倉市大町1210 德治三年（1308）銘 重要文化財〕（図3）に至り、関東形式は、ほぼ完成を見たとしている。

また、川勝氏は、関東形式の宝篋印塔の関西地方での祖形として、
額安寺宝篋印塔〔奈良県生駒市額田部寺町 文応元年（1260）銘〕^(注5)
を指摘している。

さらに、額安寺宝篋印塔・箱根山宝篋印塔・興福院宝篋印塔（後で著しく述べる）に刻まれている銘文中の大工銘

「大工大藏安清」（額安寺宝篋印塔）

「大工大和国所生左衛門大夫大藏安氏」（箱根山宝篋印塔）

「大工兵衛尉安行」（興福院宝篋印塔）

から、関東形式の成立が、大藏派石大工と関係のあることを明らかにした。^(注6)

野村隆氏は、川勝氏の研究をうけて、関東形式の特色を、各部分ごとに分類して、形式の成立の過程をまとめている。^(注7)

一方、日野一郎氏は、箱根山宝篋印塔の銘文中に見える「供養導師 良觀上人」に注目し、この塔が、良觀上人（忍性）とともに関東に下向した、奈良の律宗寺院、西大寺に所属する技術工人集団の石大工による造塔である。すなわち、大藏安氏は西大寺系の石大工であるとした。（注8・注9）

前田元重氏は、日野氏の論をさらに進め、金沢文庫古文書5246号の「堂建立書」中に見える「大工前大和権守大藏康氏」「左近将監藤原依充」と前出の箱根山宝篋印塔の銘文中の「大藏安氏」および、余見宝篋印塔の銘文中の「大工藤原頼光」とが、同一人物であることを、称名寺に遺る中世の石造五輪塔の反花座の中に、関東形式の成立過程を示すものがあり、また、称名寺と西大寺および忍性との関係から論じ、称名寺の五輪塔が、いわゆる、川勝氏のいう大藏派石大工の造立した一連のものであり、従って、大藏安氏は単なる石大工ではなく、西大寺系の関東に下向して来た工匠集団の中心人物である番匠大工であるとした。（注10）

以上の先学の業績をふまえて、箱根山宝篋印塔以外にも、箱根山には関東形式の成立過程を示す遺品があることを紹介するとともに、関東形式の成立と箱根山の石造遺品についての私見を述べて見たい。

二

本論に入る前に、関東形式の特色を明らかにする意味で、その成立の過程を示す四基の遺品、額安寺宝篋印塔・箱根山宝篋印塔・余見宝篋印塔・安養院宝篋印塔について、その各部分の特色を記すこととする。

一 額安寺宝篋印塔

この塔は、池の中島にあり、実際にその細部を見ることが出来ないので、川勝氏の「大藏派石大工と関係遺品」（史跡と美術402）に所載の福沢邦夫氏作成の実測図により、その特色を記した。

反花座は、現在ない。基礎に格狭間を彫ってあるので、反花座は必要としない。ただ、この塔と非常に良く似た特色的ある正暦寺宝篋印塔〔奈良県奈良市菩提山〕は、川勝氏が大藏派石大工の遺品としたもので（注11），この宝篋印塔の反花座は上部の反花は单弁を七個平行に列べたもので、側面は素面のままであるが、関西地方に一般に見られる反花座にくらべて、側面の丈が高くなっている。（注12）

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。区内には各々に格狭間を彫り、格狭間に内に銘文を刻む。（注13）上部は段形とし、三段を造る。

塔身は、側面の周囲に二重に輪郭を巻いて一区とし、区内いっぱいに月輪を造り、その中に金剛界四仏の種子を刻む。

笠は、下部の段形は三段、上部の段形は七段に造る。上部の段形の最上段は露盤を表現し、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。区内には各々に格狭間を彫る。隅飾突起は一弧で輪郭は巻かず素面のままである。

相輪は、伏鉢・請花・九輪・請花・宝珠の各部分からなり、請花は上下とも单弁であ

る。

二 箱根山宝篋印塔

反花座はない。

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とし、区内いっぱいに格狭間を彫る。格狭間内には銘文を刻む。^(注14) 上部は段形とし三段を造る。

塔身は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とし、胎藏界四仏の種子を刻むが、北方は法界定印を結ぶ釈迦如来坐像の像容を彫る。

笠は、下部の段形は三段、上部の段形は七段に造る。上部の段形の最上段は露盤とし、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。隅飾突起は二弧で輪郭は巻かず素面のままである。

相輪は欠失している。



図1 箱根山宝篋印塔

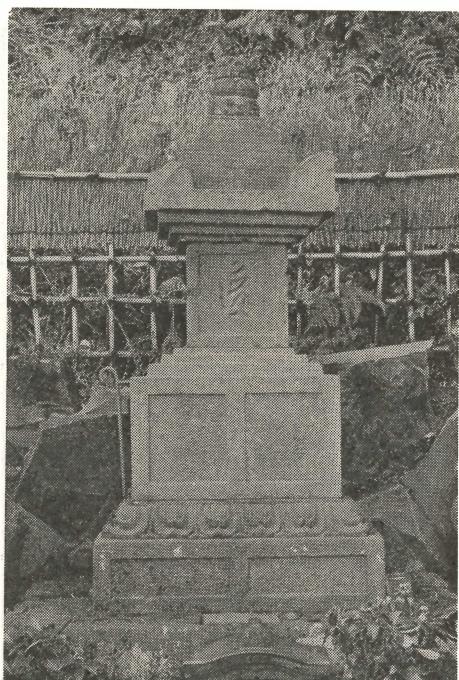


図2 余見宝篋印塔

三 余見宝篋印塔

反花座は、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。上部の反花は一面に重弁を四個平行に列べたものである。

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分け、区内には銘文を刻む。^(注15) 上部は段形とし、三段を造る。

塔身は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とし、区内には金剛界四仏の種子を刻む。

笠は、下部の段形は三段、上部の段形は七段に造る。上部の段形の最上段は露盤とし、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。隅飾突起は二弧で、輪郭は巻かず素面のままである。

相輪は、九輪の一部から上は欠失しているが、下の請花は単弁である。

四 安養院宝篋印塔

反花座は、側面の周囲に輪郭を巻き、中



図3 安養院宝篋印塔

(表一) 関東形式宝篋印塔の成立過程

	額安寺塔	箱根山塔	余見塔	安養院塔
	文応元年 1260	正安二年 1300	嘉元二年 1304	徳治三年 1308
反花座 側面 反花	なし (素面) (单弁)	なし	2区 重弁	2区・格狭間 複弁
基礎 側面 段形	2区・格狭間 3段	1区・格狭間 3段	2区 3段	2区 2段
塔身 側面 種子	1区・2重 金剛界	1区 胎藏界	1区 金剛界	1区 金剛界
笠 下段形 上段形 露盤 隅飾突起	3段 7段 2区 1弧 素面	3段 7段 2区 2弧 素面	3段 7段 2区 2弧 素面	2段 5段 2区 2弧 輪

注 表中、額安寺塔の反花座の項の()は正暦寺塔のものである。

央に束を立てて二区に分け、区内には各々に格狭間を彫る。上部の反花は一面に複弁を五個平行に列べたものである。

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分け、束部と両隅の輪郭部に銘文を刻む。^(注16) 上部は段形とし、二段を造る。

塔身は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とし、区内には金剛界四仏の種子を刻む。

笠は、上部の段形は二段、下部の段形は五段に造る。上部の段形の最上段は露盤とし、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。隅飾突起は二弧で、輪郭を底辺にまで巻く。

相輪は後補である。

以上のような四基の特色をまとめると、(表一)になる。

三

箱根山には、いくつかの中世の石造遺品が遺っているが、そのうち、箱根山宝篋印塔以外の、関東形式の成立過程を示す遺品を紹介する。

一 賽ノ河原五層塔 正和三年銘（図4）

神奈川県足柄下郡箱根町元箱根の芦ノ湖畔に、江戸時代の石仏・石塔群が造立されていて、賽ノ河原と呼ばれている。箱根山には賽ノ河原は鎌倉時代ごろから存在していたらしいが、時代とともにその所在場所も移り変って現在に至ったという。（注17）

現在の賽ノ河原の中心にあるのが、賽ノ河原五層塔である。川勝氏もその存在は承知していたが、関東形式との関係については論じられていない。（注18）筆者も、神奈川県下の層塔について取り上げたことがあるが、関東形式との関係については紙面の都合上触れることが出来なかった。（注19）

この五層塔の各部分を、関東形式との関係を含めて解説すると、

反花座はない。

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分け、区内には各々に格狭間を彫る。これは、額安寺宝篋印塔の基礎と同じ特色であり、また、額安寺塔にも反花座はない。もっとも、この塔は層塔であるため、上部に段形は造らない。向って左側面の中央の束に銘文を刻む。（注20）基礎の束に銘文を刻むのは、安養院宝篋印塔と同じである。

塔身は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とする。区内には各々に二尊の種子を刻むが、これは、金剛界四仏に觀音・釈迦・薬師・地蔵の種子を加えたものである。塔身に輪郭を巻くことは、関東形式の成立過程を示す前記の四基の宝篋印塔と共通する特色である。

笠は、現在四層が存在し、最上層の笠は、賽ノ河原とは国道をへだてた、通称「身変り地蔵」と呼ばれる一角に、中世の反花座・江戸時代の笠とともに、石幢形に組まれた笠として遺っている。（図5）はこれを図上で復元したものである。この最上層の笠は、最上部を露盤とし、側面の周囲に輪郭を巻き中央に束を立てて二区に分ける。この露盤の形も、前記の四基の宝篋印塔と共通する特色である。

以上のことから見て、賽ノ河原五層塔は、額安寺宝篋印塔と類似する特色を備えているので、大工名は銘文に刻まれていないが、大藏派石大工の手による造立と考えられる。



図4 賽ノ河原五層塔

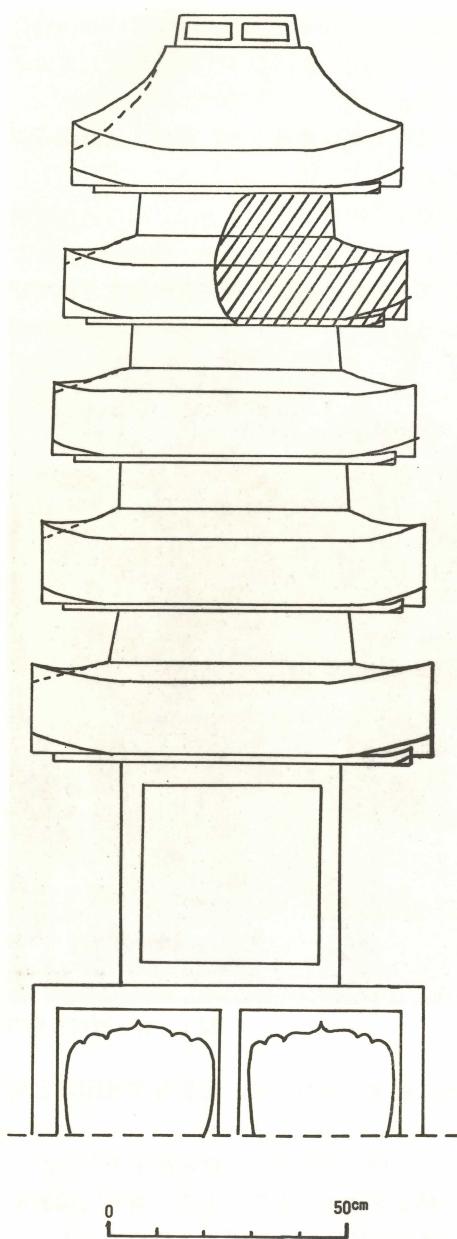


図5 賽ノ河原五層塔復元図

形として三段を造る。これも、額安寺宝篋印塔・箱根山宝篋印塔・余見宝篋印塔と共通する特色である。

笠は、下部の段形は三段で、これも、前記の三基の宝篋印塔と同じである。上部の段形は七段で、最上部は露盤とし、側面の周囲に輪郭を巻き、中央に束を立てて二区に分ける。これもまた、前記の三基の宝篋印塔と同じである。隅飾突起は二弧で素面のままである。これも箱根山宝篋印塔・余見宝篋印塔と同じである。

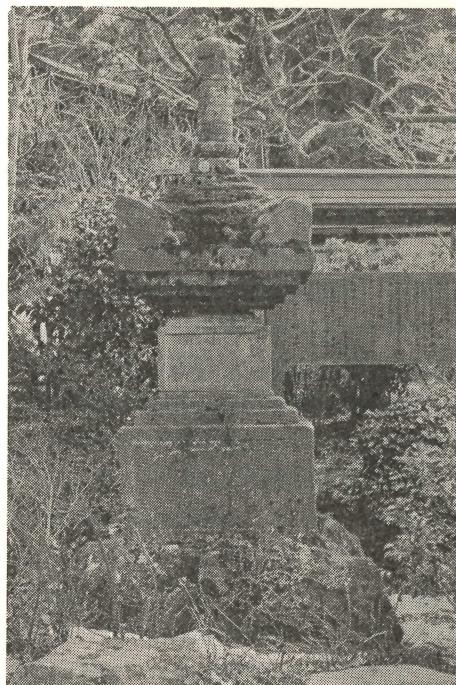


図6 興福院宝篋印塔

二 興福院宝篋印塔 元徳四年銘(図6)

神奈川県足柄下郡箱根町元箱根26にある興福院宝篋印塔は、以前、賽ノ河原にあったものが移されたもので、すでに、川勝氏により大蔵派石大工の造立であることが明らかにされている。(注21)

この塔は、基礎と笠が現存していて、塔身部には別の宝篋印塔の基礎が挿入されていて、相輪もまた、別のものと考えられる。

反花座はない。

基礎は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区とし、区内にはいっぽいに格狭間を彫る。格狭間内には銘文を刻む。(注22) これは箱根山宝篋印塔と同じである。また、上部は段

以上のように、興福院宝篋印塔の基礎および笠はすべての点で、箱根山宝篋印塔に類似する特色を備えていて、川勝氏の指摘するように、「大工兵衛尉安行」は、名前の「安」が共通することからも、大藏派の石大工と考えられる。

また、この塔に反花座はないが、箱根山宝篋印塔にも反花座はなく、基礎に格狭間を彫ることから、反花座は必要としない形式である。

尚、この塔には、塔身部に別の宝篋印塔の基礎が挿入されていることは、前に述べた通りであるが、この基礎は、側面の周囲に輪郭を巻いて一区としているが、格狭間は彫らない。また、銘文も刻んでいない。上部は段形として三段を造っている。これもまた、断石ではあるが、箱根山宝篋印塔と興福院宝篋印塔の基礎に近い特色を備えていて、大藏派の石大工が造立した宝篋印塔の断石と考えられる。

三 二十五菩薩（図7）

箱根山宝篋印塔の近くに、通称二十五菩薩と呼ばれる磨崖仏があり、付近の石造遺品とともに、全体で、「元箱根石仏群」として史跡に指定され、この磨崖仏は重要文化財に指定されている。ここには、数多くの地蔵菩薩立像が彫られているが南面と呼ばれている部分に、永仁元年（1293）の紀年をもつ銘文が刻

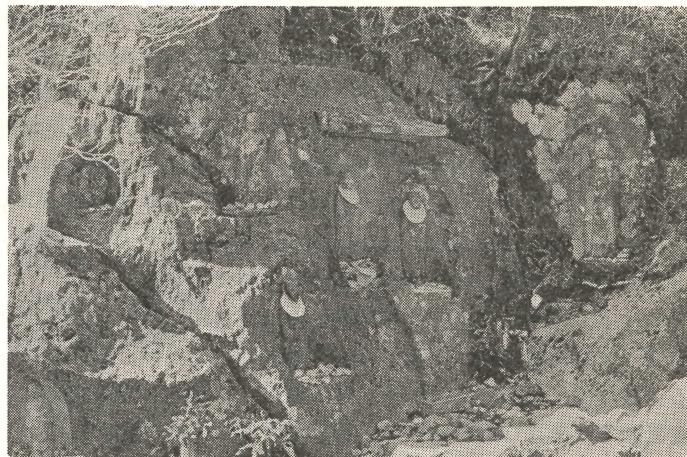


図7 箱根石仏群のうち 二十五菩薩

まれていて、その左側に石造の屋根廂が取りつけられていて、その下に、二軀の地蔵菩薩立像が彫られている。その左側の立像の下に彫られている蓮華座の反花が重弁である。この重弁は、余見宝篋印塔の反花座の反花と共通するものであり、称名寺にある五輪塔の反花座の中にも重弁の反花を持つ塔があり、前田氏の指摘するように、大藏派の石大工の作品と考えられる。^(注23)

この二十五菩薩には、別の個所に永仁三年（1295）の銘文もあり、この磨崖仏は永仁年間頃に彫られたものと考えられる。

四

関東形式の成立の過程を、川勝氏ら先学の指摘するように、

1. 額安寺宝篋印塔 文応元年（1260）
2. 箱根山宝篋印塔 正安二年（1300）
3. 余見宝篋印塔 嘉元二年（1304）

4. 安養院宝篋印塔 德治三年（1308）

することは、筆者もその通りであると考えている。すると、前に記した例、すなわち、

賽ノ河原五層塔 正和二年（1314）

興福院宝篋印塔 元徳四年（1332）

の造立の時期は、安養院宝篋印塔の造立された徳治三年（1308）より後の時期であり、関東形式はすでに完備されていた時期である。にもかかわらず、賽ノ河原五層塔は額安寺宝篋印塔と類似した特色を備えている。また、興福院宝篋印塔は箱根山宝篋印塔と類似した特色を備えている。そのほか、永仁年間の造像と考えられる二十五菩薩の蓮座に重弁があり、興福院宝篋印塔の塔身部に挿入されている宝篋印塔の基礎断石は、銘文がないのではっきりした年代は不詳であるが、やはり、箱根山宝篋印塔と類似した特色を備えている。

このように、箱根山にある石造遺品には、関東形式が完備されたと考えられる以降の紀年銘をもつ石塔類でも、関東形式の成立の過程を示す特色を有する遺例がある訳である。

これは、日野氏や前田氏の指摘するように、関東形式の成立が、大和の西大寺に属する技術集団に組み込まれていた、大藏派の石大工の動向と関連するものであろう。^(注24)

すなわち、永仁年間に、忍性に呼ばれて関東に下向した大藏派の石大工が、二十五菩薩を箱根山中に彫ったのに続き、正安二年（1300）に、忍性に呼ばれて関東に下向した「大工 大和国所生左衛門大夫 大藏安氏」が、箱根山宝篋印塔を造立した。これが関東形式の石塔類の出発点となった訳である。その後、余見宝篋印塔・安養院宝篋印塔と急速に関東形式はその形式が整備された。鎌倉を中心にして、神奈川県下に遺る多くの石塔類は、ほとんどが、関東形式の特色を備えたものである。

これは、関東において、石塔類の造立が盛んに行なわれるようになると、何回かに別かれて、大和の西大寺に所属する、大藏派の石大工が、関東に下向して来たものと考えられる。彼らは、箱根山において、先輩達が、二十五菩薩の磨崖仏を彫り、大藏安氏が箱根山宝篋印塔を造立したのに習い、彼らが今まで大和で造立していた様式の石塔を造立したと考えられる。そして、正和三年に箱根山を通過した大藏派の石大工が造立したのが、賽ノ河原五層塔であり、また、元徳四年に關東に下向した「大工兵衛尉安行」が造立したのが興福院宝篋印塔である。また、興福院宝篋印塔の塔身に挿入されている宝篋印塔の基礎についても、14世紀前半頃に關東に下向して來た大藏派石大工が、箱根山に造立した宝篋印の断石であろう。

以上のように、何回かに分かれて大和から關東に下って來た大藏派の石大工達は、箱根山で、彼らが關西で造立していた形式の石塔類を造立すると、以後、關東においては關東形式の石塔類の造立をもっぱら行なったものと考えられる。

注1 川勝政太郎 宝篋印塔に於ける関西形式・関東形式 考古学雑誌26—5 昭和11年

注2 川勝政太郎 日本石材工芸史 総芸社 昭和32年

注3 川勝政太郎 関東形式宝篋印塔の成立 鎌倉4 昭和35年

注4 川勝政太郎 大藏派石大工と関係遺品 史述と美術402 昭和49年

注5 注4に同じ

注6 注4に同じ

注7 野村隆 関東形式宝篋印塔の六分類 史述と美術471・472 昭和52年

注8 日野一郎 相模箱根の磨崖地蔵群と石造塔 東京史談20—2 昭和27年

- 注9 日野一郎 新版仏教考古学講座 3 塔・塔婆 雄山閣 昭和51年
- 注10 前田元重 箱根宝篋印塔と大工前大和権守大蔵康氏 金沢文庫研究紀要9 昭和47年
- 注11 注4に同じ
- 注12 川勝政太郎 正暦寺大宝篋印塔の一部復元 史迹と美術461 昭和51年 所載の実測図による。
- 注13 (右) 「文応元年
十月十五日
願主永弘 」
(左) 「大工大蔵
安清」
- 注4による
- 注14 (北面) 「□宮根山之勝地湛精進池之靈
泉是當六道之池法界衆生之□
建當山中之宝塔安金剛□之全
文是則為□□興隆仏法之衆善
令跋護國家之大願于時當文永
五年戊辰興國□□之□□□以
新□□□□六十六部之法華□
奉納□□已來重發大願于時
為一百余部之隨求陀羅尼与並
法華經六部令此石塔安之以功
德之□分□二所諸社之□□□廻
向之□□□□四□之□崩而已
我精立塔設化□□之□
名留碑石永斯竜華之朝
永仁四年丙申五月四日
大願主金剛仏子□円房祐禪敬白
- (東側) □□□□□□□□
供養檀那行意並平氏女
為四恩法界成仏得道
供養導師良觀上人
正安二年八月廿一日心阿
- (西側) 結縁衆
武石四郎左衛門尉平宗胤
為月光源氏女源宗経
真法覺法八田氏女三善宗俊
西念淨心戒法七宝家日
觀阿一如坊平氏女及父母
平威氏躰妙善妙
行事僧寂日隨求陀羅尼持者
大工 大和國所生左衛門大夫
大蔵安氏
願以此功德 普及於一切

我等与衆生 皆共成仏道」

赤星直忠 精進池畔の石造塔 箱根町史 I 昭和42年による。

注15 (右) 「大勧進

僧覺一

大仲臣金光

一結衆五十人

(左) 大工 藤原頼光

大□□□

嘉元二年 大才 十二月廿日 申辰

注10による。

注16 (北面) 「……………

……………塔婆

…………□上人之
(觀)

(東面) ……結縁衆之

名字所奉造立如件

徳治三季 戊申 七月 日

(西面) 大工沙弥心阿

大檀那沙弥觀果」

赤星直忠 鎌倉市史 考古編 昭和33年による。

注17 沢田秀三郎 町指定史跡「賽の河原」について 箱根の文化財13 昭和53年

注18 川勝政太郎 日本石造美術辞典 東京堂 昭和53年

注19 斎藤彦司 神奈川県下の石造層塔について かながわ文化財76 昭和55年

注20 「正和三年甲寅七月廿三日」

注17による。

注21 注4に同じ。

注22 (格狭間内) 「願以此功德

普及於一切

我等与衆生

皆共成仏道

元徳四 戌申 五月 五日

道果敬白

(格狭間外) 小工

大工兵衛尉安行

九人」

注4による。

注23 注10に同じ。

注24 注8・注9・注10に同じ。